

人の住んでいた空

南第三小学校 六年

宋^{そう} 雨^ゆ衡^{へい}

それははるか未来の事。人口が増え続けてしまう。そんな人口増加が急激に起きたために、人々に物資が行きとどかず生産の手も足りていない。どれ程人口が増えたんだと思えば、人口四〇万ちよいの町田市が百万人ごえになってしまった程なのだ。

この大問題に世界は、埋立地をたくさん作ったり、森林を開いて多くの土地を開拓したりしていたそう。それでも残念なことに、問題解決には至らなかった。

ついに途方に暮れた世界だったが、町田市はあきらめなかった。そして町田市は、思い切って大きな決断をする。

「空に人の住む町を作ろう。」

このたった一つの発言が世界をも動かしてしまう。人の住める空を作るという計画へと発展するのだ。

さて、少し前に戻ってみましょう。町田市長の発表の後、これは世界にも広がる。この計画は希望の光とも見えたが、空に町を作るなんて不可能だと言われるはめに。しかし、不断の努力を重ねてついに雲を土に変える薬が完成する。

この薬は、雲にまくだけで人の住める土に、みるみるうちに変わるのだ。また、この土はどんなものも育てられる。どんな動物、川や海に住む動物さえも住める。どんな重さ・大きさの建物も建てられる!!

この薬がつくられた経緯やつくり方は企業秘密らしい。

この大発明に世界は大絶賛。町田市長は、会社を立ち上げ、町田を本社にして世界中に広げました。おどろいたことに、本社は町田市の空の薬をまいた雲の上に建てられているそう。

その後、万能と思われた雲は実はリスにふれるとともに戻ることが研究により分かった。このデメリットを世界は気にしない。なぜなら雲にリスが登ってこられるわけもない。だからこの事を公表しなかった。

さて、今ははるか未来の三〇二四年。ぼくの名前はソラ。ここは町田のどこかの一軒家。今から空に引っ越しするんだ。空の学校にかようことができるなんてすごく楽しみだ。だけど、リスをつれていってはいけないんだって。ルールだししかたないか。でも、やっぱり自分のペットであるリスのリン助をつれていきたいな。かくれて持っていていっちゃおう。

審査員賞
宋雨衡「人の住んでいた空」

ところで、リン助っていい名前でしょ。ぼくがつけたんだ。我ながらいいと思う名前だよ。

さあ、いよいよ引っこしだ。空ってどんな感じかなあ。本当に楽しみな。雲までは長いエレベーターで行くんだって。ちよつとこわいけどどきどきする。あつ、雲の上にもう着いた。家はどこかな。どこも新しい世界でとても楽しい。

少し歩くと家が見えた。近所さんへのあいさつをしよう。

「こんにちは。」

「こんにちは。君、名前は？」

名前を聞かれたから自己紹介しよう。

「小学六年のソラです。実は市長の子です。」

と、はずかしそうに言った。

「へえ。市長さんの子どもかあ。えらいねえ。自分で自己紹介できて。」

と言い終わらぬうちに地震か。ぼくはすぐに家へにげた。地震が弱まった。

「地震、やんだよ。」

と父さんに言われた。

よかったと安心したのもつかの間、リン助がいなくなっておどろいた。

「父さん、リン助がいない。」

「なんだと。リスをつれてきたのか。」

父さんは怒るところかあわてていた。

すると、自分の家がみるみる落ちていく。ぼくはただこわかった。

後に気づいたことだが、実は雲の上のものが全て落ちてきたそう。原因はリン助だという。さいわい、ぼくたちは助かったが、これは多くのけが人を出した大きな事故となった。さらに、雲の上にあった本社も落ちてしまった。これは全世界をパニックにさせる出来事となった。

その内、空の町は危機ということになり、かつて大都市であった町田はおとろえ、市長も総辞職となった。

さて、人口増加はどうしよう。なんと、横浜市が地下に人の住める町をつくる発表をした。葉もできた。そう、今は地下に人が住んでいるのだ。

ただ、カワセミがふれるとこれはもとの土に戻り、息さえもできない。

前と同じ悲劇を起こさなければ、よいのだが…。

審 査 員 講 評 *****

空の上に街を作るという大胆な発想から始まる物語が印象的でした。細かなディテールが丁寧に描かれており、楽しく読むことができました。また、リスやカワセミ、横浜市をライバルに据えた設定など、町田を知る人が思わず笑みを浮かべるような工夫があり、オリジナリティを感じさせる作品でした。

— KEN THE 390

審査員賞
宋雨衡「人の住んでいた空」